

Title	政治紛争のなかの先住民コミュニティ : グアテマラ・マヤ系先住民の文化と自治
Author(s)	池田, 光穂
Citation	Co*Design. 2 P.1-P.16
Issue Date	2017-09-15
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/65077
DOI	10.18910/65077
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

政治紛争のなかの先住民コミュニティ： グアテマラ・マヤ系先住民の文化と自治

池田光穂（大阪大学COデザインセンター）

The Local Politics and the Communal Autonomy of a Guatemalan Indigenous Community in Conflicts

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

この論考は、グアテマラの先住民地方都市において、地方分権化の文脈が、中央の政党政治からどのような影響を受け、かつまた、現地でどのように適応を遂げているのかについて考える。池田[2012]を受けて、町長派と反町長派の対立構造が、町長選挙キャンペーンの時期に緊張度を高め、ピックアップトラックの放火事件に発展する。犯人不詳のまま選挙戦に突入し、トラックの所有者の父親が選挙偽装の嫌疑を町民の前で告発されリンチ未遂事件が起こる。他方、勝利した新町長の親族が経営する市場のテナントに新年の花火が飛び込み家産を焼失するという事件が起こり、その解釈をめぐる最初の放火に対する「神罰」ではないかという風評が流布する。この町での政治的緊張は、住民による情動の解釈図式の中に巻き込まれていったのである。

キーワード _____ グアテマラ 地方政治 先住民自治

Keyword _____ Guatemala, decentralization, politics of indigenous community

1 先住民と政治

人間のもつ政治性、政治権力、政治体制など、政治 (politics) に関わるもの一切を考察の対象とする人類学の分野を政治人類学という。では政治人類学は、近代社会や西洋社会をおもな対象とする政治学、とりわけ「現代政治理論」[e.g. キムリッカ 2005]とどのように異なるのだろうか。松森 [2005:285] は、マルク・シュオートらの所論から、従来の政治学が政治の定義を近代国家における政治制度をみるような立場をとるのに対して、政治人類学者は「前産業的、前資本主義的、非西洋的秩序を含めたすべての人間社会」における「政治なるもの」を対象とすると述べている [Swartz et al. 1966]。事実、古典的な政治人類学研究として、1930年代までのアフリカの伝統的な社会における政治社会組織を取り扱ったフォーテスとエヴァンズ=プリチャードの社会と統治のタイプの類型的関係を論じる民族誌論集 [1972] や、植民地状況における宗主国と土着社会の葛藤と統合の過程を描くバランディエ [1971] の理論的書物を私たちはすぐに示すことができる。現在でも多くの政治人類学者は、政治学者にくらべて、自分たちが扱う政治の概念は、より広い意味での「政治なるもの」を対象にすると主張するだろう。あるいは1960年代以降の旧植民地の政治的独立以降、とりわけ重要となっている、民族・ネーション (国民)・ステート (国家) を包含した現地の政治制度とその民族誌研究を、その自分たちの守備範囲に含めることだろう [e.g. Vincent 2002]。また途上国研究をおこなうフィールド派の政治学者も内戦や武力紛争後の修復的司法 (restorative justice) のプロセスに関わることなどにより、文化人類学が提供する民族誌資料を検討することを通して、政治学や歴史学研究の実践的課題の領域にさまざまな刷新をもたらしているだろう [e.g. 金 2014]。

このような政治学と政治人類学の歩み寄りの可能性があるにもかかわらず、両者のあいだには、やはり上掲の松森 [2005] が指摘するような研究対象の違いがある。端的に言えば、守備範囲が異なることによる溝がある。研究のスタイルや思考パターン (habitus) が似ていても、赴く研究対象の目的地——ギアーツの巧みな比喩によると——つまり住み処 (habitat) が異なるからである。

この論考では、グアテマラ共和国西部高地の先住民コミュニティにおける現代政治のひとつのテーマである地方自治におけるコミュニティ成員のさまざまな動きについて論じる。しかし、伝統的な先住民集落において現代政治を取り扱うのであるから、それは政治人類学の領域であろうと読者には判断されやすい。筆者は、先住民が多いことは調査対象の特徴であり、ラテンアメリカの小さな町における地方自治を論じることにこの2つの学問領域の棲み分けは関係ないと主張したい。だが、なぜ先住民集落において現代政治を論じるのかという審問は、読者のみならず筆者にもつねに去来するし、またし続けている。はやくも1928年にマリアテギ [1988:166-167,173] は、先住民地域における「インディオ問題」と「土地問題」の両方を射程に入れないと、新しい地方分権化の道は閉ざされることを訴えている。

この研究は池田 [2012] の研究の続編である。なお調査は、4年間通算で約3か月滞在しフィールドワークを実施していた町 [池田 2012:6-9] に、2012年1月から2月にかけて短期間 (およそ10日間) 滞

在し、関係者におこなったインタビューなどに拠っている。

2 | 村落における政治的脈絡

先の論文[池田 2012]においてグアテマラ共和国西部高地の先住民コミュニティにおける水源地の土地確保の問題に端を発する町長派と、それに抵抗する地元協議会派(Consejos Comunitarios de Desarrollo, COCODE)のあいだの抗争について紹介し、地方分権における民主主義にもとづく自治とは何かについて考察した。要約すると、水源地の土地を転売することで町の活性化を図る町長(当時)に対して、協議会派が刑事告発や庁舎への抗議活動を通して、タウンミーティングを実現し、最終的に住民投票を成功させ、町長派の水源地の土地開発が頓挫したというものである。

これを可能にしたのが、内戦終結の1996年末よりもはるか以前よりはじまっていた、中央政府による地方分権化(decentralización)の流れである。しかしながら実際に、地方分権の制度を住民たち自身が活用できるようになるのは2002年に制定された「地方分権基本法(Ley General de Decentralización)」(政令14-2002)以降であった。このグアテマラ西部のサンマルコス県の先住民コミュニティで報告された対立構図について筆者が得たことは、町長が率いる守旧派と、草の根住民運動を展開した協議会派の対立は、中央政府からの地方分権化を追い風にした足元からの民主主義派がおこした、住民参加の新しい地方自治スタイルの創造であったと解釈することができる。守旧派の特徴は住民にはよく知られた伝統的なネポティズムとクライアンティズムを主たる手法としていた。他方、そのような伝統的な政治的資源を持たない、町の地元協議会派は「コミュニティの人々ため」には、町内の共有地や共有財産を私人や外部のエージェントに安易に「売り渡してはならない」という言説実践、つまり反対運動を通して、町内における彼らの存在感を誇示し、一定の支持層を得ることに成功したのである。

3 | 町長および町長派による〈ママ反逆派〉に対する解釈

これが彼らの最終的な見解であった。その後、町長派の敵、COCODEのナンバー2の男性、すなわち私が〈ママ反逆派〉と呼んだ男性——仮にカルロスと呼んでおこう——は、町長選にリゴベルタ・メンチュの流れを汲む Encuentro por Guatemala[グアテマラによる遭遇・党]と連携した新しい党派 VIVA (Visión con Valores) [諸価値をもつ視座・党]の公認候補として町長選挙戦に出馬したが落選した。彼は、第4位の得票数(約2,000票)ながらも第3位の当時現職の前町長(党派UNE)と約

500票差であったために、善戦したと自己評価している。前町長派たちは、カルロスが町長選挙に出馬する時になって、はじめてカルロスの意図が、町長就任への野望に他ならなかったことを「理解」したという。町長（支持）派から見れば、つねに町政に異議申し立てをおこない、住民を「煽動」して町庁舎前でしばしば抗議活動をおこなっていた不穏分子たち、つまり町の地元協議会派（COCODE）の連中の所業は、2011年9月の町長選挙のための事前キャンペーンにすぎなかったことになる。

これらの解釈は、すでに選挙が終わり、前政権から新政権の町長に権力委譲が行われた、2012年1月末のものであった。前・町長派の言わば「事後的な解釈」であるとも言える。端的に言うと前・町長派は、多少なりとも不透明な意思決定プロセスはあったものの、町民の利益のために粛々と政策を進めていたと自己評価していた。しかしながら、町政に事あるごとに異論を唱える町のCOCODEの連中に、何ら明確な反抗の理由を見つけることができずに町長派は苦慮していた。とにかくにも、選挙戦の1年以上前の2010年9月には、私も含めて町民の誰もが〈ママ反逆派〉のこの男性が町長選挙に出る事を予想だにしなかったのである。

町民が見ていた反逆派のカルロスは、村の小学校の教師であり、週末はメルカード（市場）で肉を商う店主だ。そして公然の秘密としてマヤの伝統宗教（Cosmovisión Maya）に心酔するマヤ司祭の見習いでもあった。彼はまた、男女の若い教員たちに声をかけ伝統的な民族舞踊の再興のためにグループを組織し、教育省主催のダンスコンクールに毎年グループを引率してきたリーダーでもあった。毎年のコンクールで順位を上げるたびに、教員組織内での彼の人気は上がり、2010年中頃、彼らの念願であった団体優勝の時には、彼は地区の教員組織の代表（presidente）に就任するまでに至っていた。

したがって彼は町長選に出馬することを表明するのは、その年が明けて2011年に入ってから、それも2、3月以降だと思われる。当の本人は2011年1月には私に対して「（選挙戦で）自分を支援してくれる党派などなく」出馬などあり得ない旨の発言をしている。実際に、COCODEに歯科クリニック新設計画〔池田 2012:10-11〕を潰されたカナダ系NPOに属する地元代表は、この〈ママ反逆派〉の男性の町長選キャンペーンは実際に出馬声明後約5ヶ月間続いたと証言している。だとすると町長選に彼が候補者として姿を現すのは2011年4月、それもその月末近くになってからである。2012年初めのインタビューで、選挙活動をふり返って彼は「候補者になるのが遅すぎた」と述懐している。

したがって、前・町長派の内部においても、利益誘導を主目的とする「プロジェクト」誘致をする団体が多い中で、なぜこの町のCOCODEの彼の一派だけが、利益誘導を動機とした政治活動をせず、町長および町政にただ刃向かうのか、長い間、住民もそして調査者である私も疑問のままであったのだろう。選挙期間中であろうとなかろうと、前・町長——エリアスと仮名で呼ぶことにする——の党派（UNE）に敵対する党派は、町の中に他にも多数いた。例えば、現・町長の愛国党（PP）などは、後述するように、それに遡る4年前、村での無効票の意図的操作疑惑事件で相当頭に来ているはずだったのに、現実の政治においては主だった反発はしていなかった。また、町会にいて前・町長を支えていたある議員（consejal）は、その前の政権与党だった右派政党・グアテマラ共和国戦線（FRG）の長い支持歴をもつ人で、今般の町長選にも出馬し、第2位で落選している。選挙時における党派の競合と、町会

の運営における議員の間の党派を超えた関係は、まったく別の原理によるものであることがわかる。

町の政治の文脈においては、選挙時のクライアンティズムにおける党派支持の色分け図式は、当選後のネポティズムに必ずしも対応関係がないのである。国政レベルでの既成政党の議員たちもまた、党派のイデオロギーやポリシーすなわち行動原理にそれほど強く縛られているようには思えず、イデオロギーよりも実利的な人間関係を優先する。言い方を変えると党派間の議員どうしの野合は比較的簡単に起こりやすい。そのため、それぞれの党派内の結束は政策やイデオロギーで結びつくよりも、カリスマ的な指導者にすり寄るかたちで形成される。そして、所属党派間の移動もまた、我々からみたら、節操もない鞍替えや政策の変更も平気で行なわれることがある。少なくともサンマルコス県シェラマドレ山脈地方での政治は、選挙戦以外では党派対立が見られることは少なく、むしろ利益誘導を第一義とする政治行動原理のほうが重要なのである。それゆえ、この先住民コミュニティでの選挙キャンペーンが始まる以前の、ここで言う〈mam反逆派〉の町政に対する根本的な異議申し立て運動がおこった当時(2008-2010年)は、町長派にとっても、彼らが抗議のものを自己目的化したと思えるほど感情的になって前・町長に、なぜゆえ刃向かうのか理由が分からなかった可能性がある。前・町長もその支援者も、〈mam反逆派〉の当時の反発について、ほぼ全員が前倒しの「町長選挙キャンペーン」あるいは長い選挙キャンペーンにすぎなかったのだと事後的に解説せざるを得なかったようだ。

4 | 自動車への放火事件

2011年9月の町長選挙時における前・町長派(UNE)とおぼしき男性とその家族に振りかかった暴力(自動車への放火)および、彼に対するリンチ未遂事件は、町民全体を巻き込んだいわゆる「政治的紛争」と言えるものではない。むしろ首謀者を特定しにくい破壊工作あるいはテロ事件である。この事件の「被害者」の男性をここで、仮にドン・フェルナンデス(63歳)と呼んでおこう。

ドンは、カソリック教会に長く関わり、この町でアクション・カトリカの刷新運動にかかわったS神父の在任中(1969-2003年)のかつての運転手だった[池田 2012:7]。ただしドンは、この町の出身ではなくサンベドロ・サカテペケス出身である。彼は青年期に教会での活動を通してこの町にやって来きて、ほどなくしてここに定住することになった。彼の年長の息子カスティージョ(仮名)は頭もよく、父は神学校に進ませることに決めた。やがて息子は神父に叙階され、同じサンマルコス県の別のコミュニティの教会に赴任していた。ドンは5期前の町長選にキリスト教民主党から出馬したことがある(その際は第3位で落選)。ドンは、今回の選挙で、前・町長(UNE党)から選挙管理委員に任命されていたため、多くの住民はドンが筋金入りのUNEの党派の支持者だと思っていた。そして前・町長も、再選を目指してUNE党から再度出馬した時に、ドン・フェルナンデスをその有力な支持者であることを信じ、また選挙キャンペーンで町民の前でそうであると主張していた。しかしながら事件後のインタビューにおいて、彼

はUNEの前・町長を選挙運動で支援すること、その党派の支持者であることには「関係はないこともある」と微妙な表現を私にしていた。

町長選と国政選挙の前日の9月10日、カステージョ神父は、教会のピカピカの新車ピックアップトラックに乗り故郷にもどった。この町に住む別の神父は、この自動車のことを指して次のように言った：「町の人たちの中には、綺麗な新車に神父が乗っていることが、外国の鉱山会社からの贈り物ではないかと疑心暗鬼で噂する者もいた」と。さて、カステージョ神父は、実家であるドン之家に、弟の車と並んで縦列駐車をして、家に入った。そして実家の家族と団欒し、夜の11時には全員が床についたという。

異変があったのは夜中の12時半ごろである。ドンの携帯電話に突然の着信があった。通話はすぐに切れたので、送信先に電話したところ、教会の信徒であった電話の主は「兄弟よ、すぐ家の外に出たまえ、君の自動車が炎上しているぞっ!」と叫んでいた。家の外に飛び出てみたら、ピカピカのピックアップトラックは（窓を割られたのか）そのシートを中心に内部が燃え上がっていたという。2人の息子も動員して、家族全員で、服をつかつたり、水をかけたりしてようやく鎮火した。ドンの家ののはすかい（斜交い）に、野次馬とおぼしき愛国党（PP）の支持者たち——これはドンによる説明である——が多数いた。しかし彼らは誰も燃えている自動車への消火活動を助けようとせず、この模様を眺めていたのだとドンは述懐する。その場に居合わせた先の電話の通報者はドンに対して「もし（彼が）連絡しなかったら、灰になっていたぞ」と忠告した。このようなことが起き、家族は、もう眠ることができなくなり、ほどなくして朝を迎えた、という。気がついたら2011年9月11日選挙投票日の午前4時になったという。以上がドン自身による述懐である。

しかしながら、この投票日前日の事件について、ドンが私に語らなかったことが1つある。それは〈ママ反逆派〉のリーダーでVIVA党の候補者カルロスがこの騒ぎに巻き込まれ、真夜中にドンが直接カルロスの家に出かけて、火付けの嫌疑をかけて彼に激高したということである。ここでは被害者になったカルロスの説明によると、この件で、無実の彼の選挙参謀2名が、この自動車への放火の嫌疑により身柄を拘束されたという。カルロスが語るには、10日の夜、彼は選挙参謀2名と夜の10時半すぎまで町内の友人の家で対策を練っていた。彼はそれが済みようやく家に帰り、就寝した後、夜中の2時頃になり、家の戸を叩きまくり、またベルを押しまくり、騒音を立てている男——フェルナンデスその人——が現れたのである。カルロスの両親を含めて家族全員が、不安になった。彼の妻が戸の小窓を開けて確認したところ、ドンが、怒って立ち「お前らの党の連中が僕の息子の車に火をつけたのだらう。カルロスが車を燃やした!」と玄関の戸の前で叫んでいる。ドンの激高の理由を聞いたカルロスはようやく玄関に出て、ドン・フェルナンデスに対して、まず冷静になってくれと頼み、そのような嫌疑は根も葉もない誤解で、カルロス自身には何も分からないことを説明した。ちょうどその頃（夜中の2時ごろ）国家市民警察（PNC）の警官たちは、ドンたちの申し出により、カルロスの選挙参謀で夜中にバイクに乗っていた小学校教師の2人の仲間を、ドン・フェルナンデス宅前の神父の自動車への放火の嫌疑で、身柄を拘束していた。カルロスによると、町長選の候補者たちは、選挙キャンペーンの期間中は、さまざまな刑事訴追の嫌疑にかけられることから免責される。それゆえに、候補者であるカルロスには写真付きの身分証明書が発

行されていたために、警察に拘束されることはなかったという。無残に内装が焼かれた件のカスティージョ神父のピックアップトラックは警官による検分の後に、教会の敷地に移動された。

5 | ドン・フェルナンデスへのリンチ未遂事件

明けて2011年9月11日、選挙投票当日の朝である。昨夜の事件でほとんど眠れなかったドンは、自分に与えられた選挙管理委員の仕事で、彼の所轄になっている近隣の村に出かけた。選挙の運営と監視は、町が任命した選挙管理委員のほかに、不正の防止を兼ねて候補者のいる政党から監視監査委員 (fiscal) を出すことになり共同で運営することになっていた。この村の投票場に姿を現したドンの姿を見つけた愛国党 (PP) の委員が、彼に詰め寄り、4年前のスキャンダル (後述) を彷彿させつつ、最後には激高しドンに向かって「こいつは、エリアス (現職候補) に印をつけた投票用紙をもって、ここにやってきたぞっ!」と威嚇した。まわりにいた人たちの中には、この男の挑発に呼応する者がいて、ドンの周りにはやがて黒山の人だかりができた。そしてドンが気づいた時には、その男が彼の胸ぐらを掴んでいたという。この一触即発な情況について住民から通報を受けた国家市民警察 (PNC) の警官たちが、そこに派遣された。警官たちは住民たちを説得し、ドンはやがて人だかりから解放され、自分の住んでいる町に護送された。そして、ドンに対して自宅で待機するべきことを警官たちは「助言」した。ドンは、前夜の自動車放火事件のことを含めて怖くなり、その日は自宅からは一歩も出なかったという。教会関係者の話によると、前夜に燃えたカスティージョ神父の車に、ドンが細工をした投票用紙が隠されているはずだという住民——はたしてそれは愛国党の支持者なのか——の申し出により、教会に保管されていた燃えた車のなかを町の神父がわざわざ検分させられるという事態も引き起こされた。

群集の中で1人だけになり孤立して糾弾されること。そして、前夜の自動車の放火で使われた灯油あるいはガソリン。この2つのことだけでも、先住民の誰しものが、容易にありうべき最悪の事態を想像することができる。すなわち村人によるリンチ事件の危険性があったということだ。リンチは和平合意後のグアテマラにおいてしばしば起こってきた陰惨な出来事である。国家市民警察 (PNC) が取り締まり拘束しても、その後に、簡単に被疑者を釈放する警察に対して住民は不審感や憎悪の念をもつ。被疑者——こそ泥や誘拐、あるいは恐喝や脅迫などがその容疑——が収監されているPNCの駐在所の前に三々五々集まり、大きく膨れ上がった群集は、棒切れやマチューテ (山刀) などを持ち、次第に警察に声を上げて抗議するようになる。そうして最後には、警官たちに容疑者を引き渡すことを強要することがある。不幸なことに身の危険を感じた警察官たちは自分たちに攻撃が及ばないことを含めて、しばしばそのまま容疑者を解放する。言うまでもなく、それは容疑者を群集に「渡す」ことになるわけで、群集は容疑者を捕縛し、糾弾が始まる。最後には、集団でリンチにかけ、しばしば倒れている瀕死の容疑者に石油類をかけて燃やしてしまうことが、グアテマラ全土でこれまでに何度も起きてきた。この町でも

10年以上前にこそ泥の嫌疑をかけられた住民に対して、リンチ事件が発生していた。

いずれにせよ、このドン・フェルナンデスに対するリンチ未遂事件以降、UNE党の候補者で前・町長であったエリアスは、第3位で落選した後、その後数ヶ月もたたないうちに、この町の住民から「彼は逃げた」「シェーラ(ケツアルテナンゴ)で仕事している」「この町にはいないよ」と噂されるまでに、ひっそりと身を隠して生活していた。エリアスの行状の変貌の理由が、このリンチ未遂事件によるものか否かは定かではない。しかし、その時期以降この町でUNE党派であることに強く失望感を抱くようになった住民は多い。

今回の町長選では第1位(約4,000票で、第2位とは約1,500票差)で圧倒的な強さで当選した愛国党の支持者においてもなお、かつての怨嗟の記憶を甦らせたと思われる、ドン・フェルナンデスが関与した4年前の選挙スキャンダルとは何であろうか? 前回の報告[池田 2012:9-10]における水源をめぐる紛争が起こるおよそ1年前の2007年9月の町長選挙の時に、ドンは今般の事件が起こったのとは反対方向の山側に位置する別の投票場の管理責任者に任命されていた。しかしながら、開票終了直後に、この投票場から開票本部に送付されなかった投票用紙の束が発見されたのである。この時の選挙では、当時現職だった前町長のUNE党のエリアスが当選したのだが、第2位となった愛国党(PP)の町長候補者——彼はリンチ未遂事件のあった2011年の選挙で当選するが店主ラサロと名付けておこう——とその支持者たちは納得せず、その有効票化をめぐる選挙管理裁判所まで上訴する事態にまで至った。開票直後の混乱のなかで、町の選挙管理委員会では喧々諤々の議論がおこなわれた。最終的に無効票に扱われた投票用紙であるが、この票の「すべて」がラサロに投票されたものだという爆弾発言をもって、委員会の席上で「告発」したのが、当時の愛国党の支持者で、その村に勤めていたある小学校教師だった。

彼は、ドンと共にこの投票場の選挙管理委員でもあった。この教師は、後に〈ママ反逆派〉のリーダーになる男性の友人であった。そして、教員組織による民族舞踊団の踊り手であり、カルロスが教員組織の代表者になった際に、教員の民族舞踊団の責任者をカルロスが辞任することになるのだが、後をついで舞踊団の責任者になったのが、この小学校教師だった。ドン・フェルナンデスは、投票場の無効票を見逃してしまった現場の当の責任者であった。しかし、彼(ドン)が選挙管理委員会で糾弾を受けた時に、自らに降り掛かる攻撃の矛先を、やはり現場で業務についていたもっと年の若いある女性教員に押し付け、自らの責任を転嫁したと言われている。その4年後にドンへのリンチ未遂事件で、愛国党の選挙監視員から告発された投票場のある場所というのが、この女性教員が勤めていた小学校があった村だったのだ。女性教員は、グアテマラの文部省から研修のために韓国に派遣された経験がある有望で信頼のある人だった。それゆえ、教員の間では、彼女の名声ゆえ、当時のドンが選挙の不首尾の責任を彼女に転嫁したことは、周囲の人たちのドンに対する信頼を大幅に失うことになった。逆に彼女は2012年からは町の中学校の校長に任命されるという出世をすることになる。

したがって、2011年9月の町長選挙の際に、すでに社会的に信用を失い、また脛に傷のあるドン・フェルナンデスが選挙管理委員として町長エリアスから任命されることになったことは、町長の政党すな

わちUNE党への信用をますます落とす結果となった。それゆえ、彼の4年前のスキャンダルを覚えている町民たちからは、ドンの選挙管理委員への就任には全く不適任の「好ましからざる人物」(*persona non grata*) [ラテン語]と見なされていた可能性が高かったのである。

ドンにとっても、またドンに批判された有能な女性教員にとっても、あるいは住民全体に対しても不幸だったことは、選挙や町政に関わる重大問題が起きた後に、公正な調査と審理が行われず、その科[とが]について処罰がなされなかったことにある。そのため、疑念が持たれた人に対する審査や、本当に科のある人に対して無処罰(*impunidad*)のままで放置されることが、住民のその人に対する潜在的な憎悪を増殖させてしまう原因になる。そして問題が起きた時に、犠牲の山羊に対するが如く、苛烈な暴力がむき出しになり、かつその疑念を持たれた人に向けられるのである。時には憎悪だけが独り歩きして、無関係で無垢な人さえも巻き添えにすることさえある。このような事態が一度発生すると、小さな暴力はエスカレートし、人々を冷静にすることができなくなり、もはや途中で中断することが困難になる。

誠にこれだけの報告を聞けば、日本の読者は、グアテマラの先住民社会は不正義と住民の疑心暗鬼が跋扈する、極めて恐ろしい場所であるかのような心証を抱かれるかもしれない。2011年の町長選挙にみられるように、町民の政治や投票さらには自らの治安、すなわち統治に関しては、マヤの先住民が手にしている民主化の構造やその内容たるや、それらは極めて脆弱でありかつ不透明であると判断するだろう。放火事件やリンチ未遂事件を、その最後の局面だけにおいてのみ見れば、ドン・フェルナンデスに向けられた住民の憎悪の心の闇を想像するに、誠に「出口なし」(*A puerta cerrada, Huis Clos*)の暗い気持ちにもなることであろう。そして、住民自身がつまづき公公正たる自治能力を、はたして近未来の彼らが「獲得」することができるだろうかや疑念を持ち、彼らの財政や権力の管理能力をもっと強化するように外部からの「介入」が必要なのではないか、とも言いたくなる。「人間の安全保障」という面が当地ではまだまだ不十分だと私たちは判断してしまうのである。

ここに見られるのは、先進国をモデルにする、安定した「市民政治体」(*civic polity*)と対照化される「頹廢した政治体」(*corrupt polity*)の具体的でリアルなグアテマラの実態なのであろうか。私は今般の調査では、いわゆる嫌疑をかけられた人にも、それを糾弾してきた人たちにも、短い間であったが「民主主義とは何ですか?」「良い民主主義とはどんな政治的状态なのですか?」ということを倦む事なく聞いてきた。その中で、もっとも印象深かったのは、雑貨屋の店頭で清涼飲料水を奢ってもらいながら話を聞いた村からきた中年男性の「グアテマラの民主主義は、(本当の)民主主義じゃない」という自己反省的な言及であった。それは、ある意味で床屋政談のような投げやりな放言にも聞こえる。しかし、それを他ならぬ同胞ではない日本人調査者にわざわざ語ってくれたわけだから、私としては先住民からのさらなる問いかけだと思わざるを得なかった。そして彼に「では本物の民主主義とはどんなことを意味するのですか?」と問わざるをえなかった。政治の理念とは、つねに具体的な事象に即して考えなければならぬからである。

6 神罰説の検討

この2つの事件やその後の意外な出来事に関する[当事者以外の市井の]人々の解釈を聞くと、この町の人々も、またここで調査する人類学者(=私)と同様、これまで起きてきた「諸事件」をさまざまな角度から理解しようとしていることが分かった。例えば、カステージョ神父のピカピカの自動車が放火されたことについては、人々は次のように言う:「自動車はもともと教区の貧しい人たちの教会への喜捨(limosna)で購入されたのだから[私用で使われた]自動車が燃やされる神罰を受けるのは当然だ」。つまり、火がつけられた直接原因は個人間の怨恨に端を発する党派間の抗争のせいかもしれないが、その根本原因はもっと大きなレベルでの意味、つまり超自然的だがより大きな道徳的な意義(=貧民の上にあぐらをかくことに対する、神様による処罰)があることを人は忘れてはならないと言うのだ。

この「神罰」説は、その後、次のような信じられない出来事がこの町で起こったために、人々にはより迫真的な説明になってしまった。振り返ってみよう。愛国党の支持者たちはこう考えた。5年前の2007年の時点では(彼らの言によると)「エリアスを首謀とし、フェルナンデスを実行犯とする、UNE党勢力の陰謀による投票の不正操作」により敗北を期したが、今回の選挙ではそれをはねのけて——国政レベルでの愛国党の勢いも手伝い——念願の当選を果たした、と。しかし、当選から3ヶ月以上たった2011年の大晦日にその事件はおこった。大晦日には例年、人々は夜半から年が明けてからの真夜まで大量の花火を打ち上げて新年の到来を祝う。愛国党の新しい町長の一族は、メルカード(市場)で雑貨を商っているが、同時に爆竹や花火もまた彼らは扱っている。その新年の花火がメルカードの彼らの商店の中に飛び込んで、商品の爆竹や花火に「不幸にも」引火して、彼らの店そのものがあついう間に全焼してしまったというのだ。この時には、町長就任を2週間後に控えている愛国党の商人に振りかかった災難は、それに遡る3ヶ月前の神父の新車に対する放火事件との関係、つまり仕返しではないかということを当然のことながら人々に想起させた。しかし人々は人間間の諍いではなく、次のように噂した。勝利に酔いしれたはずの新・町長とその兄弟たち一族の家産が火事で消失したのは、やはり(愛国党のメンバーが多い)この一族こそが、フェルナンデス神父の自動車の放火したことの証明であり、神は奢れるこの一族に天罰を下したのではないのか、と。だから、先の事件はやはり双方の側に非があり、どちらが正しかったのかという判断はできない。これで、おあいこという訳だ。

グアテマラの地方分権化の方向性は、その後の政権になってもいまだ不安定な状況の渦中にある。2012年1月14日に中南米各国からの首脳を集めた派手な就任式をおこなった1986年の民政移管後初の軍人出身の愛国党大統領オットー・ベレス・モリーナ(Otto Perez Molina, 1950-)——2015年9月に任期満了を待たずに辞任——による新政権は、その着任直後に、1994年から続いてきたグアテマラの地方自治の政府系の開発基金であるFODIGUAの解体の方針を示した。さらにUNEによる前政権時代末期に、次期選挙対策も兼ねた前・大統領のファースト・レディ主導による、特別給付金政策をおこなっていたが、ベレス大統領は候補者時代から激しくこれを指弾した。それゆえ政権発足

以降、元・夫人には一族を使った資金洗浄疑惑も報道され、刑事訴追の噂すら流れた。言うまでもなく世界的な財政再建政策の流れの中にグアテマラも置かれており、地方自治と分権化政策にも、もはや中央政府からの資金は、以前のように地方にはやってこないぞ、という政府の非公式的なメッセージにも聞こえる。

折りしも全国紙は、2012年1月26日から3日間、首都において全国自治体連合 (ANAM, Asociación Nacional de Municipalidad de Guatemala) の結成があったことを報道していた。そこでは全国の333の自治体から234自治体の関係者が集まり (そのうち首長は211人に及んだ) 初代会長と書記が選出されたという。会合の最終日には12日前に就任したばかりの大統領も訪問し、政府としての支援を約束している。これを契機に、自治体の首長が結集し、国家に対してどのような要求をしていくかを占うことは難しいが、これからこの組織がどのように展開してゆくかは、グアテマラの人々ならず我々にとっても非常に興味深い。奇しくも2015年4月以降のペレス政権からの汚職者の大量逮捕と9月の大統領辞任劇においてはグアテマラ全土で大統領辞任要求デモがおこったが、これは1954年のクーデター以降ほとんどみられなかった全国的な政治社会運動の60年ぶりの再演でもあった。そこには自治体間の連携があったとは言えないが民主主義の担い手としての市民の意思表示の現場が確実に形成されてきていることの証左である。これまでの地方自治体間の紛争の多くは、境界紛争や隣接する道路での課税権などをめぐる争いなどであり、せいぜいその紛争の調停を中央政府に依頼するものが多かった。それゆえ、その当時においても、あるいは現在においてもなお、自治体どうしが共同して政府に建設的な注文をつけていくことなど未だ想像すらできないからである。

ピックアップトラックの放火事件、選挙偽装の嫌疑から発展したリンチ未遂事件、そして、新年の花火が飛び込み家産を焼失するという事件。この町での政治的緊張は、住民による情動の解釈図式の中に巻き込まれていった。

7 結語

冒頭で示唆した先住民と政治の研究における本研究の位置づけについて答えて、この論考を閉じることにしよう。

(1) この論考で取りあげる政治的ヘゲモニー (合意に基づく主導権) をめぐる対立に、先住民文化は何か影響を与えているだろうか?

メスティーソとの混淆社会よりも、先住民の集落であることは、我々=民衆=人民という意識の同質性がつよくなり、価値観や行動観が均質であるように思われがちだ。しかし、ここでの事例の検討には、メスティーソとの混淆社会と同様に、政党や利益集団 (profit group) が連携やあるいは紛争の主体になる点で両者の間に違いはないように思われる。「神罰説」は先住民が伝統的価値観に縛られ神話

的世界を生きているという文化的ステレオタイプを裏打ちするようにも考えられるが、冷静に考えれば、それが非先住民の観点——現にカステージョ神父もその解釈が理解可能だと示唆した——から見ても、先住民は神話的世界を生き、それ以外の人たちは現実的であるという悪しきステレオタイプな説明は、全く説得力を欠くように思われる。

(2) 地方分権というテーマをこのコミュニティの事例でおこなう学問的正当性はなにか？

地方分権の理念・枠組み・政策手法は、少なくとも中央政府や地域文化アイデンティティの強化や援助に携わる欧米のNGOなどを通して、中央から周辺にもたされるものだろう。地方分権の実態は、そのような中央からの「働きかけ」に対する、地方政府や市民の「応答」とのダイナミズムの結果であろう。中央からの「働きかけ」は法律や政令など均質なものかもしれないが、「応答」にはさまざまなパターンがあることが考えられる。将来、地方自治体単位の「応答」の多様性について考察するためには、まず、ある地方自治体の共同体内部のダイナミズムを詳細に分析する必要がある。

(3) この事例における地方分権と（筆者である私が言う）民主主義とのかかわりをどのように理解すればよいのか？

アレクシス・ド・トクヴィルは、民主主義の形成と維持に、習俗・習慣・慣習の重要性に着目し「自由の体験学習」(*apprentissage de la liberté*) [小山 2006:68] が新生アメリカの可能性を見出している。小山[2006]によると「民主主義の3つの学校」として、自由の学校としての「地方自治」、法的精神の学校としての「陪審」、そして共同精神の学校として「アソシエーション」の様態を、新大陸での経験をド・トクヴィルは検討したという。その響[ひそ]みに倣うと、グアテマラが多数派である先住民を巻き込んだ民主主義を生み出す可能性をもつのであれば、それは現在進行中の地方分権の経験からボトムアップにあるのではないか、という見通しをもつ。

(4) 紛争事象はさまざまな政治的アクターが交錯する場であると一般に言われているのに、ここでとりあげる事例は対立する双方の言説を立ててそれを対比的に論述しているが、その方法は妥当か？

当初は、町長派の政治手法に抵抗するある地元協議会派(COCODE)の対立構図しか見えていなかった。だが、実際には、町長選挙においては、さまざまな分派にわかれて紛争しており、また政策論争というよりも、町内における政治腐敗をめぐる紛争にほかならなかった。「民主主義ではない」という批判的理性を、今後さらに探究するためには、「対立する双方の言説」を対照的に表現して分析する方法には限界があるかもしれない。

(5) このコミュニティは、西洋的な法制度および政治制度が未熟ないしは十分に執行されていないがゆえに問題なのではないか？

法制度や政治制度の基盤は、先の論文[池田 2012]に論じている。法制度や政治制度のプラットフォームは不十分というものではない。それゆえ運用の未執行というテーマが出てくる。じっさいに、法は運用の基盤を整備するものであり、それを実際に使ってみないと、政治は機能しない。争点のない政治は、政治的反省プロセスを忘却させ、人民が自ら改善する能力を削ぐことに貢献するのではないか。法制度や政治制度を十分に機能する可能性があるかどうかを検証するには、十分にそれを使って、そ

の運用方式を通してさまざまな相違点をあぶり出し、彫琢していく必要がある。真の試練は、具体的な政治的プロセスの中にあるということだ。

冷戦期の時代から右派、左派、そしてリベラル派、「軍事主義」派を問わず、常套句として常に声高に使われ続けている「民主主義を建設する」(constructuendo democracia)ことが、地方政治の文脈の中でどのような具体的像を結ぶのかについて、今まさにこのコミュニティの人たちには試金石になっている。先に触れた、村の先住民の男性の「つまりグアテマラの民主主義は、民主主義じゃないってことさ」(“O sea la democracia de Guatemala no es democracia”)という言葉は、私にそのまま反響し「日本の民主主義は、君が考えるところの本当の民主主義なのかい?」という彼らからの問いかけのように思える。私は、大統領をはじめこれまでの統治に携わる政治家が倦むことなく繰り返し言う絵空事のようなスローガン「民主主義を建設する」よりも、この村人の鋭い異論ないしは批判を彷彿させるこの言葉「つまりグアテマラの民主主義は、民主主義じゃないってことさ」のほうに、建設的提言や審問が含まれるように思われる。この問いを通して、人々は「民主主義アイデンティティ」の形成途上にあると表現すれば言いすぎだろうか[恒川 2006:13]。

この論考では、2011年9月に第1回目の大統領選挙と同時に行われた町長選挙における紛争事例を取り上げ、首謀者を特定しにくい2つの暴力的事件(自動車への放火およびリンチ未遂)と、その後の住民による事件の解釈について考察した。地方分権の理念・枠組み・政策手法は、中央政府や地域文化アイデンティティの強化や援助に携わる欧米のNGOなどを通して、中央から周辺にもたらされる。他方、地方分権の現実とは、そのような中央からの「働きかけ」に対する、地方政府や市民の「応答」とのダイナミズムの結果である。中央からの「働きかけ」は法律や政令など均質で一般性をもつが、地方社会自身の「応答」にはさまざまなパターンがある。地方自治体単位の「応答」の多様性について比較考察するためには、広域的な地域社会特性[パットナム 2001]と、特定の地方自治体の共同体内部のダイナミズムの事例を積み上げてゆく必要があるように思われる。

謝辞

本研究はJSPS科学研究費補助金「中米先住民運動における政治的アイデンティティ」(科研費)22401011の助成を受けたものである。

参考文献

- 池田光穂(2012)「地方分権における先住民コミュニティの自治：グアテマラ西部高地における事例の考察」『ラテンアメリカ研究年報』31:1-31.
- 小山勉(2006)『トクヴィル』筑摩書房.
- 金美景とB・シュウォルツ(編)(2014)『北東アジアの歴史と記憶』稲正樹ほか訳, 勁草書房.
- キムリッカ, W(2005)『現代政治理論』岡崎晴輝ほか訳, 日本経済評論社.

- 恒川恵一（編）（2006）「民主主義体制の長期的持続の条件」『民主主義アイデンティティ』恒川恵一編, 1-23. 早稲田大学出版部.
- バランディエ, G. (1971) 『政治人類学』中原喜一郎訳, 合同出版.
- フォーテス, M. と E. エヴァンズ=プリチャード (1972) 『アフリカの伝統的政治体系』大森元吉ほか訳, みすず書房.
- 松森奈津子 (2005) 「「政治的なもの」の再検討: 政治人類学の貢献」『国際関係学部: 国際関係・比較文化研究』(静岡県立大学研究紀要) 3-2:283-302.
- マリアテギ、ホセ=カルロス (1988) 『ペルー現実解釈のための七試論』原田金一郎訳, 柘植書房.
- パットナム, R. (2001) 『哲学する民主主義』河田潤一訳, NTT出版.
- Swartz, Marc J., Victor W. Turner, and Arthur Tuden eds. (1966) *Political Anthropology* (Chicago: Aldine) pp.4-7.
- Vincent, Joan.(ed.) (2002) *The anthropology of politics: A reader in ethnography, theory, and critique* (Malden, Mass.: Blackwell).

(投稿日: 2017年5月11日)

(受理日: 2017年6月27日)

The Local Politics and the Communal Autonomy of a Guatemalan Indigenous Community in Conflicts

Mitsuho Ikeda

This paper describes the recollections of social events involving local politics and communal autonomy of an indigenous community in conflicts in modern western-highland Guatemala, that is the sequel of the argument written by the same author issued in *Anales de Estudios Latinoamericanos* (No.32, Pp.29-31, 2012). The local indigenous people with whom the author conducted ethnographic study is the *Mam* (an ethnonym of the third largest population among Guatemalan Mayan Community).

The series of conflicts proceeded as such; the conflicts began with a charge complaint of larceny against a local landowner. This person was accused of “owning land common as his own property,” on the communal water sources through private mediation by city mayor. The plaintiff was a group of members of the local development advisory group (*Consejos Comunitarios de Desarrollo*, COCODE), which the author named “political rebels.” There were common interests between the land owner and the city mayor’s group who claimed that the land would be of benefit to the “local economic development programs.” The rebels thought that the water source should be maintained as both communal natural resource and “sacred natural symbol of indigenous people.” The rebels’ strategies took a series of political actions; e.g. the criminal prosecution against communal sanction, the demonstration before city hall, and the public request for referendum. The reasons of their winning derived not only by their own actions but by the political climate of local autonomy that had been applied as the national legislations of decentralization policy, e.g. *Decreto* 14-2002, by the central government since the end of twenty centuries.

The author treats mainly four episodes with his ethnographic interpretations; (i) Communal interpretations of the political rebels. After the success of the political demonstrations against the conservative mayor group, the deputy of COCODE stood in the mayor election. People interpreted *a priori* that he had intended to become a political leader with personal greed referring to the traditional interpretation that political participation is motivated by personal pursuit for nepotism or personal interests, not by public one. But there were circumstantial evidences *a posteriori* that he had decided to become a candidate because his idealism brought him more interest in the challenge to change the city’s *status quo* than in becoming mayor. (ii) Incendiarism case against the pick-up truck of a Catholic missionary. One family was labeled as an alien ethnic group, *mestizo* o *ladino* even though self-nominated as *indígena*, for their place of origin is in the Indian district outside of the town. The head of the family had been working for Catholic Church for a long time and his son became a priest in another town. Because of the history of ethnic relations of the town, the situation regarding this church was politically contradicting at that time.

The gorgeous pick-up truck could be interpreted as xenophobic object of the alieu by anyone regardless of the political parties they belong to. At one day before the city mayor election, this incendiarism case happened. (iii) Unexploded lynch against a person of political minority who was alleged fraud in the local election. The head of the family of the incendiarism was also rumored with vote manipulation in previous city mayor election. Because of the excitement of election day and the incendiarism case one day before, people were highly nervous against him. And the crowd grew to a mob to lynch him, but local police let him flee from the voting place and then he survived. (iv) So called, “divine punishments” of both sides among political enemies. After the awful and nervous days, people changed their interpretation of incendiarism case from accusing xenophobia to “divine punishments” against missionary receiving poor people’s donor charities. And then, after emerging this interpretation, the shop owned by the newly elected mayor and his family, was fired down by new years fireworks. People said that God also punished them not to be arrogant.

There may be invisible discrepancy between political studies and political anthropology because of the segregation in research topics and objects. Political scientists may study focusing on “modern and western” political systems on one hand, political anthropologists may on “traditional and non-western” social systems as the political issues on the other. Breaking this discrepancy the author annotates the significance of treating comparative studies and in-depth interviews of modern indigenous issues, as a consequence of the fact that these anecdotes could be worth thinking.